

Title	ニーバーの「冷静を求める祈り」(The Serenity Prayer) : その歴史・作者・文言をめぐって
Author(s)	高橋, 義文
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.4, 1994.2 : 242-271
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3397
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ニーバーの「冷静を求める祈り」(The Serenity Prayer)

—その歴史・作者・文言をめぐって

高橋義文

神よ、

変えることのできるものについて、

それを変えただけの勇氣カレイジをわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受け入れるだけの冷静セレンティティさを与えたまえ。

そして、

変えることのできるものと、変えることのできないものとを、

識別する知恵ウイザダムを与えたまえ。

(大木英夫・訳)

O God, Give us

Serenity to accept what cannot be changed,
Courage to change what should be changed,
And wisdom to distinguish the one from the other.

はじめに

一九四三年夏のある日曜日のことであった。その日、ラインホルド・ニーバーは、夏の別荘があったマサチューセッツ州西部の山村ヒース (Heath) の小さな会衆派教会で説教し、そこで短い祈りをささげた。これが、のちに「冷静を求める祈り」(The Serenity Prayer) として、あるいは時に単に「ニーバーの祈り」として、広く知られるようになった冒頭に掲げた祈りの発祥であった。

この祈りは、やがてアメリカ全土のみならず、世界に広く知られるようになった。わが国には、最初は『リーダー・ダイジェスト』をおして伝えられたようであるが、一般に広く知られるようになったのは、一九六七年、大木英夫教授が、作者ニーバーの名をはじめ添えて『中央公論』誌上であらためて紹介されたからのことである。⁽¹⁾

ところで、この祈りは有名になってくるにしたがって、その歴史や背景、作者の問題、文言の違い等に関して、しばしば正確さに欠ける情報や推測が錯綜し、さまざまな困惑が生じるようになった。最近になってとくにその作者問題については、われわれにもようやく明らかにされるようになったものの、その他の問題も含めて一般に困惑は必ずしも払

拭されているとは言えないようである。そこで、現時点で明らかになっているところに従って、それらについて少し丁寧に整理しておくことにしよう。この祈りが、今後もながく人々に愛され、受け継がれていくであろうことを考えるとき、この時点で情報を整理しておくことも、意味のあることであると思われるからである。⁽²⁾

一

ニーバーがこの祈りを最初に用いたのは、冒頭に記したように、一九四三年の夏であった。この年代については、J・ビンガム (June Bingham) が、その著『変革への勇氣——ラインホルド・ニーバーの生涯と思想への序説』に一九三四年と記したため、しばらくその年が一般に知られるようになった。⁽³⁾ しかしながら、一九七〇年になって、この祈りの使用許可を求める手紙への応答の中で、死の前年でかなり重い病いの床にあったニーバーに代ってペンを執った妻のアースラ (Ursula M. Niebuhr) は、祈りが最初にささげられたのは「おそらく一九四三年」であったと、それまでビンガムによって知られていた年代を修正した。⁽⁴⁾ もちろんそれはニーバーとの相談の上での返事であったと考えてよいであろう。もっとも、その年代には「おそらく」(probably) の語が付けられており、ニーバー夫妻は自分たちの記憶に間違いのあり得ることを認める余地を残していた。しかしこの年代は現代では研究者たちによってほぼ確実なもの⁽⁵⁾ と見なされている。

説教でこの祈りを用いた礼拝が終わって、教会から別荘へ戻る途中、ニーバーの友人であり別荘の隣人でもあった、

H・C・ロビンズ (Howard Chandler Robbins) が、その祈りの草稿を譲り受けた。⁽⁶⁾ ロビンズは、聖公会の指導的な人物 (ニューヨークの聖ヨハネ大聖堂のディーンおよびジェネラル神学大学教授) であったが、当時、連邦教会協議会礼拝委員会 (the Worship Commission of Federal Council of Churches) の委員長もつとめていた。彼はその立場で、祈りを集めた小冊子を編集発行したが、その中にニーバーの同意を得てその祈りを加えた。⁽⁷⁾ ニーバーの名は付されてはいなかったが、これがこの祈りが印刷されて公にされた最初であった。

当時ちょうど第二次世界大戦のさ中であつたこともあつて、この祈りは、USO (United Service Organization) によつて、小冊子からカードに移され、各地に散在する何十万もの兵士たちに配付されるようになった。軍の将兵たちとくに指揮官たちによつて好んで用いられたのはこのときであつた。そしてこのゆえに、のちにしばしばこの祈りの作者として提督や将軍たちの名が取り沙汰されるようになった。⁽⁸⁾

戦後、正確に何年のことであつたか定かではないが、この祈りは、「アルコール依存症患者更生のための自助団体」の公式の祈り (モットー) として採用された。しかし、この団体自体は、作者が誰であるかも含めてこの祈りの背景について知るところは少なかつたようである。一九六七年になつて、アースラは、この団体の雑誌『AA グレイプツァイン』(AA Grapevine) に載つた、祈りの出所を求める記事を読み、その雑誌の編集長に、祈りの背景を説明する手紙を書き送つてゐるからである。⁽⁹⁾

ニーバーが自らペンを執つてこの祈りを公にしたのは、一九五一年に著した「貧に処する道と富におる道」という論文においてであつた。⁽¹⁰⁾ そこでは、朝鮮戦争後の核戦争の危機の中で、世界は、西欧文明の道徳的限界に直面していると

いう認識に立った上で、ニーバーは、自らの祖国アメリカに対して、パウロの言葉を用いて、今や「貧に処する道」を学ぶべき時であるとして、その富める姿に見られる傲慢を厳しく諫めて⁽¹¹⁾いる。この文脈においてその締め括りとして、この祈りが論文の末尾に置かれていた。

この頃までに、ニーバーの祈りは、広く一般に知られるようになり、各方面で種々のかたちで使われるようになっていた。しかしニーバーは、尋ねられれば、自分がこの祈りの作者であることを言明はしていたし、求められれば使用の許可をしてきた。そして実際そのような問い合わせや使用許可を求める手紙はしばしばニーバーのもとに寄せられていた。しかしいわずの版權を主張したことは一度もなかった⁽¹²⁾という。

一九六一年、この祈りを卒業祝いのカードに用いようとしたホールマーク・カード社 (Hallmark Cards, Inc.) は、ニーバーにはじめて版權の譲渡を要請した。ニーバーは、ホールマーク・カード社と、カード出版毎に5%の印税の支払いを受ける旨を含む契約を取り交わし、その時点で版權料一五〇ドルの支払いを受けている。⁽¹³⁾しかし、ホールマーク・カード社が実際にその版權を行使したのは、一九六九年になってからであった。それも、カードではなく、『献身の泉』(Springs of Devotion)と題された六四頁からなる小さなギフトブックにおいてであった。ニーバーの祈りは、その小冊に、編集者によって「これら三つのこと」(These Three Things)というタイトルが付されておさめられた。ニーバーの祈りはそれまでも種々のかたちで公になり、それによってすでに多くの人の目に触れてはいたが、作者ニーバーとの版權契約も含め通常の出版プロセスに則って出版されたのはこれが最初であった。

ニーバーの「冷静を求める祈り」は、ほんの数行のごく小さなものであったにもかかわらず、これまでに数え切れないほど多くの人々に、慰めと力を与え続けてきたであろうことは想像に難くない。人々はこの祈りをおして、あるときは変革への希望を抱き、あるときは変え得ない現実に対処する力を得つつ、一見不可解な歴史の流れの中に神の恩寵の確かなる支配を垣間見せられてきたに違いない。この祈りが歴史の秘義の深みを見据えた人物から発せられた類い稀なる言葉であることは言を俟たない。それは、真に人類の遺産と言ってよいであろう。

ニーバーがはじめてこの祈りをささげた一九四三年、ニーバーはその生涯においてもっとも充実していた時期であった。この年の始め、ニーバーの主著『人間の本性と運命』の第二巻「人間の運命」が出版された。これは言うまでもなくニーバーが、一九三九年スコットランドのエジンバラ大学にアメリカ人としては五人目のギフォード講演者として招かれた際の講演に基づくものである。その第一巻「人間の本性」(一九四一年出版)とともにこの書において、ニーバーは自らの円熟した歴史の神学を展開し、高い評価を得たのであった。

ニーバーはこの時期神学的思索を深めていく一方、社会的政治的にも多彩な活動を展開した。リベラルな平和主義やマルクス主義の影響から脱却していわゆるキリスト教現実主義の立場を確かなものにしていったのもこの時期であった。一九四〇年、ニーバーは、長年属していたアメリカ社会党を離れ、ローズヴェルト支持を表明、翌一九四一年、のちに

革新的な非政党的政治団体としてアメリカ政治に大きな影響力を持った ADA (Americans for Democratic Action、一九四七年設立) の前身 UDA (Union for Democratic Action) を結成。同じ年、不干渉主義を主張する『クリスチャン・センチユリー』誌に対抗してより現実主義的立場をとる『クリスチャニティ・アンド・クライシス』誌を発行し、それまでにも増して広範・活発な政治活動を展開する。

一九四二年、ニーバーは、母校イェール大学から名誉神学博士の学位を贈られ、また、結果的には辞退するのだが、ハーヴァード大学学長 J・B・コナント (James B. Conant) から同大学の全学教授 (University Professor) になるよう懇請されるということもあった。そのハーヴァードからも、一九四四年、名誉学位を受けている。

一九四三年、五月から七月始めにかけて約十週間、ニーバーは、ロックフェラー財団の資金提供ならびにアメリカ政府のコンサルタントの資格を得て英国に講演旅行をした⁽¹⁴⁾。それは、J・ベイリー (John Bailie エジンバラ大学教授) や W・テンプル (William Temple カンタベリー大主教) の招待に応じたものであったが、ちょうどギフォード講演の英国版が出版された直後であったこともあり、ニーバーのもとには、大学や教会およびその関係団体、さらには BBC 放送をはじめマスコミ・政府関係のさまざまなグループから講演や説教の依頼が殺到した。この英国滞在中の七月一日、ニーバーは、オックスフォード大学より、名誉神学博士の学位を授与されている。

この英国旅行は、その後のニーバーのとくに政治的活動に多大な貢献をする意義あるものであった。多くの神学者や政治家との出会いや戦時下の英国の政治状況の視察はニーバーの視野を一層広げるものであった。なかでも時の首相チャーチルの政治的指導力には、強烈な印象を受けた。

ニーバーは、七月の始め英国旅行を終えて帰国、ヒースの山荘で家族に合流、そこでしばらくの休暇を過ごすことになった。ニーバーが、あの祈りをささげたのはこのときであった。

ニーバーの生涯におけるもっとも活動的な充実期が、とりあえず、最初の脳溢血に見舞われ実際の活動が少なくとも表面上制限されざるをえなくなった一九五二年頃までと考えるなら、一九四三年は、ニーバーの生涯において上昇気流に強く押し上げられつつあるときであり、一般的に言うなら前途洋々たるときであった。

しかしながら、人生のそのようなもっとも充実し高揚しているときの言葉としては、この祈りはいかにも特異である。それは、ふつう人生のそのような時期に発せられる多くの言葉とはあまりに違いすぎるように思われるからである。一九四三年と言えばニーバー五十一歳である。この年齢にして、前途洋々たる人生の高揚期にあって、この祈りはすでに、ニーバーがその心の深みにおいて、どのようなところを生きていたかを如実に物語っている。しかもこの祈りは、何かの特別な大きな集会での祈りであって、そのための長い準備の末になされたものでなく、別荘での休暇中、おそらくは比較的ゆっくりとした雰囲気の中で、山村の小さな教会の礼拝でなされたものであっただけに、当時のニーバーのごく自然な心の姿勢がそれだけよく伝えられているように思われる。ヒースの教会での説教の内容がどのようなものであったかは残念ながら知られわれには伝えられていない。しかしわれわれの手に残されたこの小さな祈りは、英国から帰国したばかりの当時のニーバーの思想の深みを、含蓄をもってしかも雄弁に語っているように思われる。

すでに述べたように、一九五一年、ニーバーは、はじめて自らペンを執ってこの祈りを公にした。その末尾にこの祈りが置かれている、戦後の富めるアメリカを諫めるその論文で、ニーバーは次のように述べているが、それは、当時の

社会状況に適用してではあるが、ニーバーが自らこの祈りを解説したほとんど唯一の文章とも言えるであらう。

「われわれの国全体に対するもつとも重要な教訓の一つは、いかに貧に処すべきか、いかにこの時代の可能性の限界の中で生きるべきか、いかに人間の歴史における断片的で挫折を伴うことがらを受容すべきか、いかに忍耐をもつて人生の困難に耐えるべきかを、学ぶことである。われわれが、このことを忍耐と冷静セレニテイをもつてなすことができなければならないほど、われわれはそれだけ不屈の意思をもつて行動することができるであらう。キリスト教信仰は、生の無常から逃避することを教えてはいない。臆病なあきらめを教えてはいない。われわれは、自らの力の範囲において、行動し、責任を引き受けなければならない。しかし、われわれは、自分たちの力には限界があることも理解していなければならない。われわれは神ではないのである」⁽¹⁵⁾。

三

ところで、「冷静を求める祈り」は、一般に紹介され、有名になってくるにしたがって、作者としてさまざまな人物の名が取り沙汰されるようになった。多くの場合、作者ニーバーの名が付されて伝えられていなかったからである。そうした推測に上って来る名前は、通常かなり古い時代の人物である。たとえば、マルスク・アウレリウス、セネカ、アッシジのフランシスなどである。(また第二次大戦中の提督や將軍の名が祈りの作者としてあげられたこともあるが、その背景についてはすでに触れたとおりである)。

これらのことについては、ニーバー（夫妻）もかなりはやくから知っていた。すでに述べたように、ニーバーのところには各地から、祈りの使用許可やその元来の出所を尋ねる手紙がしばしば寄せられていたからである。⁽¹⁶⁾（その中には、最初から作者はニーバーでないときめつけて、ニーバーを非難する内容の手紙さえあった）。上に挙げた人物の名はそうした手紙の中に出てくる名前であった。とくに、そのような手紙は晩年頻度を増し、一九六七年の時点では、一週間に二通の割合で寄せられていたと言う。⁽¹⁷⁾

しかしながら、ニーバーは、それらの手紙に対して、一貫して自分がその祈りの作者であると答えていた。（もっとも最晩年は、ニーバーが病床にあったため、それらの手紙はアースラが筆を執った。）

ところが、死の前年一九七〇年になって、この祈りは自分がささげたものであるとのニーバーの記憶を大きく揺るがせることになる一通の手紙のコピーが、病床のニーバーのもとに届けられた。それは、ニーバーもしばしば寄稿したことのある、アメリカ・ルーテル教会（The Lutheran Church in America）の機関誌『ルーサーラン』（The Lutheran）の編集長、G・E・ラフ（G. Elson Ruff）からのものであった。それは彼が友人のM・R・マーティ（Martin R. Marty）に宛てた四月三十日付けの手紙のコピーである。⁽¹⁸⁾それは、マーティが寄せた『ルーサーラン』への記事にニーバーの祈りとその背景がビンガムに従って記されてあったことに対する編集者ラフのコメントである。

「私は、数年前『ルーサーラン』誌に同じことを書いたところ、一人の女性から、その祈りは、元来ドイツで書かれたものであって、作者はクリストフ・フリートリッヒ・エーティンガーである、と主張する手紙を受け取りました。……彼女の見解は、ニューヨークの西ドイツ領事R・フォン・ヴェクマー（Rudiger von Wechmar）が、ニュ

「ヨークで発行されているドイツ語雑誌『アウフバウ』(Aufbau)一九六〇年四月一日号に寄せた手紙に基づくものでした。私はニーバー博士に、果たして彼がこの祈りを自分の原作として使用したのかどうか、尋ねたいと思っていましたが、その機会がありませんでした。ニーバーがその読書の中でドイツ語の祈りをたまたま目にし、それに引き付けられ、それを翻訳し、ビンガム夫人が述べているように、ヒースで用いた、ということはありません。」

……(この手紙には、その一女性からの手紙にあった祈りのドイツ語版も記されてあった。)

すなわち、「冷静を求める祈り」の元来の作者は、一八世紀ドイツの神秘主義的敬虔主義神学者フリードリッヒ・クリストフ・エーティンガー(Friedrich Christoph Oetinger, 1702-1782)である(上の手紙では、ファーストネームとミドルネームが入れ違っているが)というのである。しかもそれは、それまでのさまざまな噂に等しい情報とはかなり違ったものであった。それは、それまでに耳にしたことのない全く新しい名前であったのみならず、西ドイツの外交官が伝えた情報として、かなりの信憑性を持っているように見受けられたからである。

このラフの手紙のコピーに対して、すぐさま、アースラの指示を受けて、ニーバーの秘書L・A・エヴァンズ(Louetta A. Evans)が、ラフの手紙の受取人であったマーティに宛てて手紙を書いた。(このときは、なぜか通常の場合と違って、ニーバーやアースラの名前でなく、秘書エヴァンズの名で出されている。またこの手紙のコピーはラフにも送付された⁽¹⁹⁾)。そこには、これまで多くの問い合わせに応じる手紙の内容と同じように、ニーバーがこの祈りを書いた事情を説明した上で、エヴァンズに語ったという、次のようなアースラの言葉が添えられている。

「夫は、しばしば、たとえば英国教会の祈禱書などの過去のよく知られた祈りから、文言を一部取り入れることを

したことは確かにありますが、歴史的典礼に関する彼の知識はそれほど広範なものではありません。彼は、ラフ博士の手紙に言及されているクリストフ・フリートリッヒ・エティンガーについても、「祈りの」ドイツ語版についても知りません。もちろん、潜在意識の中で受けた影響は、あるいはそれが無意識のものであっても、あらゆる形態の芸術——文学と同様音楽でも——において一定の役割を果すものです。J・S・バッハや、T・S・エリオットやシェークスピアには（そしてこの点では、イエスにも）、しばしば過去の題材の反響があります」。

以上の言葉から、ニーバー夫妻のやや困惑している姿が読み取れる。とりわけその後半の文章からは、自分の過去の記憶をあらためて根底から辿り直そうとしているニーバーの姿が想像できるようである。おそらくニーバーは、牧師であった自分の父親グスタフが用いた祈りか、あるいはドイツ敬虔主義の流れを汲む自らの出身教派において使われた祈りか、それともどこかで読んだ祈りか、いずれかが潜在意識の中に記録されていて、それを自分は知らずに用いたのかもしれない、と自らの意識下の記憶を呼び覚ます努力を重ねていたことであろう。⁽²⁰⁾

実は、この祈りは、第二次大戦後、アメリカにおけるのと同様、海を隔てたドイツにおいても、かなり早くから一般に広く知れわたっていたのである。ところが、ドイツではしばしば、この祈りの作者には、フリートリッヒ・クリストフ・エーティンガーの名が冠せられ、「エーティンガーの祈り」として知られることが多かった。ニューヨークの外交官の手紙は、この自国の状況に基づいたものであった。ドイツでは、当初エーティンガーの作であることを疑う人は一般には少なかったであろう。しかしほどなくして、ドイツの人々もまた、アメリカにおいて同じ祈りが一般的になっていることを知って当惑する人々も出てくるようになったようである。

それでは、いったいこのドイツ語版はどこから来たのだろうか。エーティンガーに発するとされたのはどのような事情によるもののだろうか。

この問題は、とくにアメリカにおいては、ラフの指摘以来、ニーバー夫妻のみならず、ニーバーを知る者や祈りの正確な出所を知りたいと思う者には、長く困惑の種となった。マーティは、ラフの指摘を受けてから、大学院の学生にエーティンガーの著作を調査させたりしたようであるが、「彼〔エーティンガー〕はかなり多量に書いている（“pretty wordy”）」との感想をラフにもらずに止まり、どうやら答えは見出せなかったようである。⁽²¹⁾

この事情が最終的に解決を見、留保がつけられてであるがニーバーこそ祈りの作者であることが確認されたのは、ニーバーの死後五年を経た一九七六年、ドイツにおいてであった。しかもその留保はほとんど根拠のないものであった。その後、このドイツの資料がアメリカに伝わり、そこで公にされたのは、一九八五年になってからであった。

ドイツにおいてこの事情が明らかにされたのは、『自己表現における教育学』と題された、一八八九年から一九〇六年の間に生まれた教育学者たちの自伝的回想のエッセイ集の第二集（七編のエッセイが収められている）の最後に収録されている、テオドール・ヴィルヘルム（Theodor Wilhelm）の回顧の文章においてであった。⁽²²⁾ その中で、ヴィルヘルムは、「冷静を求める祈り」のドイツ語版は自分が作ったものであること、そしてその原作者は歴史上の人物エーテ

インガーではなく、ニーバーその人であることを明らかにしたのであった。

ヴィルヘルムは、一九〇六年生まれのドイツの教育学者である。法学と歴史学の二つ学位を得、政治に興味を持っていたが、やがて教育学に専門を変更、一九三八年、オルデンブルク教育大学で私講師となった。戦後一九五一年からフレンスブルク教育大学で、一九五九年からはキール大学でそれぞれ教授を務め、一九七一年に引退している。

ヴィルヘルムは、上のいわば知的自伝的回顧とでも言えるようなエッセイの中で、「フリートリッヒ・エーティンガーとフリートリッヒ・クリストーフ・エーティンガー」なる標題をつけた部分数ページにわたって、「祈り」の背景を説明している。そこに、祈りの作者をめぐる情報が錯綜したその経緯が明らかにされている。

まず錯綜は、ヴィルヘルムが戦後著したいくつかの著作において、「フリートリッヒ・エーティンガー」の名を自分のペンネームとして用いたというところから始まる。そして一九五一年に出版された、エーティンガーの名を用いたその最初の著作『政治的教育の転換点』において、ニーバーの祈りを引用したのであった。⁽²³⁾しかしそこには、当時の彼がその祈りとともに得た情報に従って、「無名の古い祈り」(anonymes alte Gebet)としておいた。つまり、エーティンガーなる人物の著書に引用されたゆえに、そしてそれが古い祈りであったとされていたがゆえに、それはやがて、歴史上の人物エーティンガーが祈りの作者とされる錯綜を生むことになってしまったのであった。

ところで、ヴィルヘルムは、自らのペンネームとして、エーティンガーの名を選んだ理由についても述べている。それによると以下のようなことであった。ヴィルヘルムは、シュヴァーベン⁽²⁴⁾の敬虔主義者ヨハン・アルブレヒト・ベンゲルが彼の母方の先祖であることをつねづね誇りに思っていたようである。実際、ベンゲルが用いた自家用のギリシャ語

新約聖書は、いつも彼のベッドサイドにおかれていた。そこで、自らのペンネームを考えたとき、彼は敬虔主義者たちの中にその名前を求めたのである。ところが彼によれば、文筆家の名前としては、「ベンゲル」は洒落た (elegant) 名前には思われなかった。同じ敬虔主義的伝統の中にあるエーティンガーの名を思い付き、それを採用したというのである。しかし、エーティンガーのフルネーム「フリートリッヒ・クリストーフ・エーティンガー」を名乗るのは、ペンネームとは言え、あまりにおこがましいと思われたので、ミドルネームの「クリストーフ」をはずして、「フリートリッヒ・エーティンガー」とだけしたのであった。⁽²⁴⁾

ヴィルヘルムが、ニーバーの祈りをはじめて目にしたのは、一九四六年、カナダの友人からヴィルヘルム夫妻のもとに送られてきたカードによってであった。それは以下のように英語で書かれてあり、「古い小さな祈り」(an old little prayer) という言葉が添えられてあった。

God grant me the serenity to accept the things I cannot change,
the courage to change the things I can,
and the wisdom to know the difference.

ヴィルヘルム夫妻は、このカナダの友人の行為を「戦後協調の最初のしるし」として受けとめたが、それに感謝する気持ちからであったであろうか、夫妻で直ちにこの祈りの翻訳を始めた。ちなみに、ヴィルヘルム夫人は、アメリカの

ヴァッサー大学を卒業した、「文学にも芸術にも明るい人物」⁽²⁵⁾であった。翻訳の過程で問題になったのは“serenity”(冷静、平静、平穩、落ち着き、晴朗)の訳語をどうするかであり、それをめぐって夫婦の間に論争があった。最終的に、ヴィルヘルムの主張した“Heiterkeit”(明朗、快活)ではなく、夫人の提案した“Gelassenheit”(平静、沈着、落ち着き)を採用することにした。そして夫婦の最終稿は次のようなものになった。

Gott gebe mir die Gelassenheit, Dinge hinzunehmen.

die ich nicht ändern kann.

den Mut, Dinge zu ändern, die ich ändern kann.

und die Weisheit, das eine vom anderen zu unterscheiden.

ヴィルヘルムは、これを先に触れた戦後最初の、そしてエーティンガーの名をペンネームとした最初の自分の著書に収めたのであった。

それから数年を経たというが、ヴィルヘルム夫妻は、ある日新聞の記事に、この祈りが「有名なシェヴァーペンの敬虔主義者フリートリッヒ・クリストフ・エーティンガーの言葉」として載っていたのを見つけて驚いた。しかし彼らはその時点では、この出典明示の間違いは限定された地域におけるものであろうと軽く考えていたようである。ところが、まもなくして彼らは、この間違いがはやすでに止め難い状況で広がっていることに気付くのである。ヴィル

ヘルムによれば、それらの祈りの文言は明らかにヴィルヘルム夫人の文体であった。そこには、“Gelassenheit”の訳語があつたからである。彼らは、この訳語をもって彼らの文体のしるしと考へていた。

確かに、ヴィルヘルム夫妻のドイツ語版の重要な特徴が、夫妻の自負は別にしても“Gelassenheit”の訳語にあつたことは確かであろう。通常、“serenity”の訳語として直ちにこの語が出てくるとは思へないからである。⁽²⁶⁾そして、それは、ヴィルヘルム夫妻の翻訳の特徴になつただけでなく、一八世紀の敬虔主義者エーティンガーの作とされるようになるその重要な一因ともなつたのである。なぜなら、“Gelassenheit”は、M・エックハルト(Meister Eckhart)やJ・タウラー(Johannes Tauler)やH・ゾイゼ(Heinrich Seuse)など中世の神秘主義者によつて強調された徳であり、その後の神秘主義的・敬虔主義的流れにおいても、独特の重要性を担つた言葉であつたからである。⁽²⁷⁾

こうして、ニーバーの祈りのドイツ語版は、しばしば一八世紀の敬虔主義神学者エーティンガーを作者とされて、ヴィルヘルム夫妻も驚くほどのやさですでに一人歩きするようになっていた。それは、さまざまな論文、講演、説教等で使われ、カレンダーや格言集などにも見られるようになった。ヴィルヘルムは、そのいくつかを記しているが、その中に、ラフのもとに届いた一女性の手紙に出てきたニューヨークの外交官ヴェクマーの名も出てくる。この人物はその後、西ドイツ政府の報道官になつたようであるが、一九七四年その職務から退任する時、後任者にこの祈りを教訓として残したという。ヴェクマーにとつてこの祈りは座右の言葉となつていたのである。

一九五〇年の末、ヴィルヘルムは、この祈りが、コブレンツ(西ドイツ中部の都市)にある西ドイツ連邦軍の「指導と道徳理念」学校(die Schule der “Inneren Führung”)⁽²⁸⁾の女関ホールに掲げられていることを知つた。すなわちこの祈

りは、連邦軍の学校のモットー (der Wahlspruch) にまでなっていたのである。またシュバイデル將軍 (General Speidel) もこの祈りを用いたが、ヴィルヘルムによれば、彼はこの祈りによって、戦後の新しい軍の精神を特徴付けようとしたのであった。しかし作者はそこでも一八世紀のエーティンガーとされていた。

また、作者としてエーティンガー以外の名も取り上げられることがあった。この祈りがラテン語に訳されたことがあったことからセネカなどの名が上ったり、宗教人では、ベネディクト修道会士や枢機卿 J・ニューマン (John Newman) などの名が上ったりした。

ヴィルヘルムは、以上のように、ニーバーの祈りのドイツ語版の歴史を述べた後、最後に、新しい調査によれば、この祈りの源泉は、「有名なドイツ系アメリカ人神学者・哲学者ラインホルド・ニーバー」であることが明らかになったとしてこう述べている。

「たとえニーバーが、このテキストの元来の『考案者』(Brinder) でなかったとしても、彼こそ、この祈りを、広範なアメリカ大衆の意識の中に導入したその人である。助けを必要とし、疑惑の中にいる何千という人々が、プラグマティックな敬虔の賢明な解決によって助けを得ることができたその功績は、シュヴァーベンのエーティンガーにではなく(私のそれにでも、敬虔主義者のそれにでもなく) アメリカ人ニーバーにこそ帰されるべきものである」²⁹。

ヴィルヘルムがいつ頃、祈りの作者としてニーバーの名を知ったのかは明らかではない。しかし、ヴィルヘルムは、ニーバーの名については、「すでに長い間存在していた推察」であると記しているが、それからすると、ドイツでもエーティンガー以外の名が取り沙汰されるようになる中にニーバーの名も上がっていた、ということだったのであろう。

最終的にヴィルヘルムが確かなものとして情報を得た資料は、ビンガムの書であった。注において、この書とそこに書かれている祈りの歴史を紹介しているからである。年代もそこにある一九三四年を採用している。しかしヴィルヘルムは、上の文章にも示唆されているように、ビンガムの説明を受け入れた上で、ニーバー自身は自分が原作者であることを主張していないとして、ニーバーの背後にさらに源泉があるものと考えている。そして、彼はそれが「一四世紀の英国の祈禱書 (Common-Prayer)」に遡る可能性を推測している。しかしながら、ニーバーの背後には、英国の祈禱書におそらくは通暁していたであろう妻アースラの存在⁽³⁰⁾があることや、すでに引用したように、ニーバーは、「英国教会祈禱書などの過去のよく知られた祈り」を利用することはあったが、「歴史的典礼に関する彼の知識」はそれほど広範なものではなかったというアースラの証言に照らしても、さらには、「一四世紀」という不確かな年代(英国にいわゆる祈禱書 The Book of Common Prayer が生まれたのは、一六世紀になってからである)から考えても、ヴィルヘルムの推測には確かな根拠はなかったと言っ⁽³¹⁾てよいであろう。

いずれにしても、このヴィルヘルムの表白によって、ニーバーの祈りがエーティンガーの作とされた経緯は明らかになった。しかし、このヴィルヘルムの回顧が収められた書物は、教育学関係者を越えて一般大衆の目に触れるような性格の書物ではなかったため、この経緯は、今日のドイツでもなお一般に十分に知られてはいないようである⁽³²⁾。

この情報がアメリカに伝えられたのは、それから九年後、一九八五年、R・W・フォックス (Richard W. Fox) の『ラインホルド・ニーバー伝』によってであった。フォックスは、ヴィルヘルムの文章を、ドイツのニーバー研究者のひとり R・ノイバウアー (Reinhard Neubauer) をとおして入手した⁽³²⁾と言⁽³²⁾う。このフォックスの作業の意義は、ア

メリカでは大きなものであった。その書『ニーバー伝』自体には今日多くの批判が浴びせられているものの、ことこの点に関しては、フォックスの貴重な貢献として評価する声が高い。この書によって、アメリカにおいて長く続いた戸惑いがようやく解消されるようになったからである。

しかしながら、フォックスはこの祈りを、もっぱらそれをめぐるさまざまな人間的エピソードに焦点を当てて取り上げているが、そこには問題がないわけではない。そのエピソードは、作者問題を指摘されてニーバー夫妻が当惑したこと、父親グスタフがそれを嫌って祖国を飛び出したドイツの軍隊において百年後に息子の祈りが用いられたこと、また、晩年ニーバーの祈りを刺繍した飾り物が、ニーバーの嫌うニクソンの言葉「サイレント・マジヨリテイ」と混同されて宣伝されたりしたことなどである。フォックスは、そこに見られる皮肉な状況にしきりに注目するが、この祈りの深みとその神学的意義、あるいはニーバーの生涯におけるこの祈りの意味などに関しては、ほとんど注意を払っていない。そのような姿勢はこの書の全体に見られるものであるが、フォックスは、そのようにしてこそ人間ニーバーの史的姿が浮き彫りになるものと考えたようである。しかしそれが、ニーバーの生涯の特質をとらえる視座として妥当なものであるかどうかについては疑問がある。その神学的深みに対する洞察を欠くところに、たとえ人間性の描出に力点を置いたものであっても、正しいニーバー像が約束されることはないと思われるからである。フォックスの書は、ニーバーの祈りの作者問題についてアメリカにおいてはじめて正しい資料を紹介したことに見られるように、その旺盛な資料渉猟によって幾多の新しい事実を明らかにした。それゆえにそれは、ニーバーに関する情報の点では、今後とも重要な文献であり続けるであろうが、ニーバーの生涯や思想の解釈の点では、上に指摘した基本的視座に大きく影響されていて、問

題の多いものである。

ニーバーの祈りは、本来、ニーバーの生涯や思想そのものと本質的な関係を持つものであり、そのような文脈においてこそ取り上げられてしかるべきであった。

五

ニーバーの祈りについては、その文言について、困惑を覚えることも多い。この祈りには、本稿でもすでに明らかのように文言の異なった版がいくつか見られるからである。

実際、細かい違いや、その変形と思われるものまで含めると、版の数はほとんど無数に上るであろう。アースラは、「非常に多くの異なった形」(so many different forms)⁽⁸³⁾があり、本来のかたちからの「さまざまな逸脱した版」(various deviations)⁽⁸⁴⁾も見られると述べている。

違いのえられる主な部分は以下の点である。便宜上、“serenity”を含んだ部分を一行目、“courage”を含んだ部分を二行目、“wisdom”を含んだ部分を三行目とし、本稿の冒頭に掲げたものとの比較でそれを指摘しておく。

- ①冒頭に、“o”がないものがある。
- ②一行目で、“give”が“grant”になっているものがある。
- ③一行目で、“us”が“me”となっているものがある。

④ 一行目と二行目で、“what”が“the things that”になっているものがある。

⑤ 二行目で、“should”が“ought to”になっているものがある。

⑥ 二行目で、“should”が“can”になっているものがある。

⑦ 二行目と三行目でも“give us”を繰り返しているものがある。

⑧ 三行目で“and”がないものがある。

⑨ 三行目で“distinguish”が“know”になっているものがある。その場合、前者では“the one from the other”が、後者では“the difference”となっている。

以上のような違いがそれぞれ違った組み合わせにもなり、またそれに冠詞の有無、句読点の有無や違い、行頭の文字の大文字化の有無などが加わり、版は多様になる。

ところで、一九五二年、ニーバーが自らはじめて公にしたときの祈りは次のようになっていた。⁽³⁵⁾

God, give us the serenity to accept what cannot be changed;

Give us the courage what should be changed;

Give us the wisdom to distinguish one from the other.

それでは、どれが、ニーバーがヒースで最初にささげた時の祈りだったのだろうか。実は、ニーバー自身にも記憶は

はっきりしていなかったようである。ニーバーの晩年、アースラは、ニーバーと相談の上であると思われるが、各方面からの問い合わせに応じる手紙の中で、文言を訂正したり、彼らが本来の文言にもっとも近いと考えた版を知らせていたが、残されている晩年のそうした書簡を見ると、そのアースラの訂正作業にも変遷が見られるからである。彼らの記憶はそれほどはっきりしたものではなかったのである。

そのアースラによる訂正の変遷の最後に、上に挙げたものとは別はかなり大きな文言の変更が見られる。その変更が見られるのは、一九六九年三月二〇日の手紙においてである。それは以下のように⁽³⁶⁾なっている。

God, give us the grace to accept with serenity the things
that cannot be changed,

courage to change the things that should be changed,
and the wisdom to distinguish the one from the other.

すなわち、大きな変更は、一行目の“the grace to accept with serenity”という文言である。アースラは、これをもって、最終的に本来の祈りにもっとも近いかたちと見做した。

アースラが、この形をもってオリジナルと最終的に判断したのが実際にいつであったかは明らかではない。少なくとも、一九六七年一月の手紙では、まだこの形にはなっていない。したがってそれ以後のことであることだけは確かであ

る。もともと、一九六七年に書かれたニーバーの最後のエッセイ⁽³⁷⁾にもこの祈りが入っているが、それはすでに変更後の形になっているところからすると、最終的判断がなされたのはこの年であったとも考えられる。もともとこのエッセイは、ニーバーの死後、一九八四年になってからアースラの手によって発表されたものであったが、そのことを考えると、この祈りにはアースラの手が加わっている可能性も否定できない。

いずれにしても、アースラは、一九六九年以降、そしてニーバーの死後も、この形をもって問い合わせに応じている。また、彼女は、一九七四年、ニーバーの説教と祈りを集めて、それを『正義とあわれみ』⁽³⁸⁾と題して出版しているが、そこにもこの形でニーバーの祈りを収めている。

しかしながら、これまで「冷静 (serenity) を求める祈り」と呼ばれてきたように、“serenity”の直載な祈求から始まっているところにこの祈りの特徴の一つがあったと思われるが、この最後の版では、その直載さがやや後退し、冗長なものになってしまったように感じられる。そして、“what”でなく、“the things that”をとっていることがそれをさらに助長しているようにも思われる。むしろ、ビンガムが記し、その後一般にもっともよく知られてきたと思われる、冒頭に掲げた形のほうが、無駄がなく簡潔で、しかも美しいかたちになっているように思うのは、筆者だけだろうか。

おわりに

以上で、ニーバーの「冷静を求める祈り」をめぐる錯綜した情報はかなりの程度整理できたかと思う。

ニーバーは、上に触れた最後のエッセイで、祈りの作者を問い合わせる手紙に自分がそれであると返事を書く度に、病の中にあつて不安を覚えていた自分自身のうちに、この祈りの精神に反している姿を見せられて困惑している、と告白している。⁽³⁹⁾しかしわれわれは、そのような姿にニーバーの「謙虚」^{レミダス}を見るのであるが、この「謙虚」のゆえに、その最晩年、祈りの作者問題に困惑を深くしている老ニーバーの姿も想像される。

ニーバーは、ラフからの手紙を受けとつた明るる一九七一年、六月一日木曜日の夕べ、静かにそして安らかに (serenely) 息をひきとつた。それは、七九歳の誕生日を三週間後に、結婚四〇周年の記念日を半年後にひかえた日であつた。

ニーバーはついに、祈りの作者問題に当惑したまま世を去つた。しかしながら、この祈りを深い意味においてつねに心のうちに秘めつ、文字通りその精神に殉じた人が、ラインホルド・ニーバーその人であつたことは間違いないであろう。歴史におけるパラドックスとアイロニーを人一倍鋭い感性をもつて認識していたニーバーは、その歴史の中で、冷静さ^{セレニテイ}と勇氣^{カレヂ}と、そしてその両者を見分ける知恵^{ワイザム}を求めつつ、神の限りない恩寵に一切を託して、与えられた生涯を精一杯生き切つたのである。

六月四日の葬儀のおり、ニーバーの年来の親友でもあつたユダヤ教の碩学、ラビ、A・ヘッセル (Abraham Heschel) は弔辞の中で、「ニーバーの生涯は、行為のかたちをとつた歌、それも永遠に続く歌であつた」と述べたというが、それになぞらえて言えば、ニーバーの生涯は、「行為のかたちをとつた祈り、それもいつまでも続く『冷静を求めぬ祈り』^{セレニテイ・プレヤリ}」そのものであつた」と言えるかも知れない。

「冷静を求める祈り」として、また、「ニーバーの祈り」として知られたこの小さな祈りは、歴史の深みをふまえた祈りとして、またそれゆえに人間の心の深層の希求を代弁するものとして、これからも人々の心に変わらず神の恵みを訴え続けていくことであろう。

注

(1) それは、「預言者的知性と祭司的知性」と題された論文の末尾においてであった。この論文は、後に大木英夫『終末論的考察』（中央公論社、一九七〇年）に収録された。同書二二—二六頁参照。

(2) 筆者はかつて、「この祈りの作者問題についてその事情を簡単に報告したことがあった。（『冷静を求める祈り』の作者をめぐって）『形成』へ一九八六年四月号、No.184〈一八一—一三三頁〉。しかしそれは、そこにそう記しておいたように、*Richard W. Fox, Reinhold Niebuhr, A Biography* (New York: Pantheon Books, 1985) に拠って報告した暫定的なものであり、また一部説明不足の部分や、正確さに欠ける記述も含む不十分なものであった。本稿は、その後フォックスの資料を追跡調査しつつ、その他の資料にも当たって得た情報を含めてまとめなおしたものである。また、最近やはり作者問題に関して、荒木忠義氏が、F・シュルツの記事を翻訳して紹介している。『冷静を求める祈り』の由来をめぐって』『聖学院大学総合研究所ニューズレター』vol. 2-1 (一九九二年)、一六一—一八頁 (Frieder Schulz, "Über die Herkunft des 'Gebetes um Gelassenheit', Oetinger zugeschrieben," *Theologische Beiträge*, 2/ 1990)。この記事はこの祈りをめぐるドイツにおける状況を一部垣間見せてくれる興味深いものではあるが、資料的には、後述する一九七六年のウィルヘルムの回顧の文章やそれをアメリカに伝えたフォックスの書にはなく、その後

出されたニーブナーのアンソロジーに付された編集者R・M・ブラマンの序文の情報 (*The Essential Reinhold Niebuhr, Selected Essays and Addresses*, ed. by Robert McAfee Brown, New Haven/London: Yale University Press, 1986, p. xxiv) を根拠にした不十分なものである。またそこでは「この祈りがどのような経緯でヘーティンガーの作と知られ、広まったかについては明らかではなかつた」。

(3) June Bingham, *Courage to Change, An Introduction to the Life and Thought of Reinhold Niebuhr* (New York: Scribner's, 1972), p. iii.

(4) Letter of Ursula M. Niebuhr to H. Wickliffe Rose, March 6, 1970. [この書簡をなごる、以下に引用する書簡類はすべて「The Papers of Reinhold Niebuhr」Container No. 36 in The Manuscript Division, The Library of Congress に収められた手紙のうちのひとつである。]

もっとも、ニーブナー(夫妻)が、一九七〇年以前にコンガムの年を修正した可能性もある。しかし現在のところそのような資料は見つかっていない。

(5) Cf. Charles C. Brown, *Niebuhr and His Age, Reinhold Niebuhr's Prophetic Role in the Twentieth Century* (Philadelphia: Trinity Press International, 1992), pp. 112, 258; Ronald H. Stone, *Reinhold Niebuhr, A Mentor to the Twentieth Century* (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1992), p. 140. 祈りの発祥の年代について、正確に「probably」を付けてその年代を記しているのはC・C・ブラマンのほうである。フォックスは一九四三年の年代を十分に確認はできなかったようであり、この祈りをニーブナーは「少なくとも第二次大戦までには使い始めた」と述べたに止まっている。Fox, *Reinhold Niebuhr*, p. 290.

(6) 祈りな「封筒の裏に走り書きされた」と記しているのは、R・M・ブラマンである (R. M. Brown *The Essential Niebuhr*, p. xxiv) が、その情報はどこから得られたかは明らかではない。少なくとも「残されているニーブナーやアースラの書簡類には、ロビンズに渡した草稿がどのようなものであったかについての情報はなう」。

- (7) Letter of Ursula M. Niebuhr to H. Wickliffe Rose, March 6, 1970.
- (8) *Ibid.*
- (9) Letter of Ursula M. Niebuhr to the Editor of *AA Grapevine*, January 3, 1967.
- (10) Reinhold Niebuhr, "To Be Abased and to Abound," *The Messenger*, Vol. 16, no. 4 (February 13, 1951), p. 7.
- (11) Fox, *Reinhold Niebuhr*, p. 290; C. C. Brown, *Niebuhr and His Age*, p. 113.
- (12) Letter of Carl Goeller, Managing Editor of Hallmark Cards, Inc. to Reinhold Niebuhr, January 10, 1961.
- (13) Letter of Webster Shott, Editorial Director of Hallmark Cards, Inc. to Mrs. Reinhold Niebuhr, May 25, 1966; Letter of Richard L. Rhodes, Book Editing Manager of Hallmark Cards Inc. to Mrs. Reinhold Niebuhr, February 21, 1969; Letter of Mrs. Palmer Meek, Book Dept. of Hallmark Cards, Inc. to Mrs. Reinhold Niebuhr, February 30, 1969.
- (14) C. C. Brown, *Niebuhr and His Age*, pp. 111-113; Fox, *Reinhold Niebuhr*, p. 217 f.
- (15) Niebuhr, "To Be Abased and to Abound," p. 7.
- (16) その一編 一九六六年—一九七二年の『The Papers of Reinhold Niebuhr』は取巻のなれはじらぬ。
- (17) Reinhold Niebuhr, "A View of Life from the Sidelines," *The Christian Century*, Vol. 111, no. 40 (December 19-26, 1984), p. 1195. 444' の G H ャ ャ ャ ャ' 終り R. M. Brown, ed., *The Essential Niebuhr*, pp. 250-257 に収録せられ
てゐる。
- (18) Letter of G. Elson Ruff to Martin R. Marty, April 30, 1970. の G M. R. Marty' 宛の 446' の 446' の 446' の 446' の
445'。
- (19) Letter of Loretta A. Evans to Martin R. Marty, May 11, 1970; A copy of this letter to G. Elson Ruff.
- (20) Fox, *Reinhold Niebuhr*, p. 291.

- (21) Letter of G. Elson Ruff to Loretta A. Evans, May 18, 1970.
- (22) Ludwing J. Pongratz, hrsg., *Pädagogik in Selbstdarstellungen*, II (Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1976), S. 315-347.
- (23) Friedrich Oetinger, *Wendepunkt der politischen Erziehung* (Stuttgart, 1951), S. 251; 2. Aufl. *Partnerschaft als pädagogische Aufgabe* (Stuttgart, 1953), S. 263. (第二版では書名が変更された。) エーティンガーが実際にはウィルヘルムのペンネームであることは、この第二版において一般に知られるようになったという。(シュレルツの記事では、第一版と第二版の書名が繋ぎ合わされてしまって、両版の区別がつかっていない。シュレルツ、上掲記事、一七頁。)
- (24) *Pädagogik in Selbstdarstellungen*, S. 329. ウィルヘルムの回顧の文章の末尾には、彼の主要著作のリストがある。それによれば単著は七冊であるが、そのうち三冊がペンネーム、エーティンガーの名で出されている。エーティンガーの名は、ウィルヘルムのペンネームとしては、ほどなくして一般の認知を得たようである。ちなみにドイツの学者年鑑によれば、ウィルヘルムの項目にはペンネームとして「エーティンガー」の名も付記されている。 *Künshners Deutscher Gelehrten-Kalender: Bio-bibliographische Verzeichnis deutschsprachiger Wissenschaftler der Gegenwart* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1992), S. 4085.
- (25) *Pädagogik in Selbstdarstellungen*, S. 330. ここで用いられるウィルヘルムの言葉である。
- (26) ちなみに手元の英独小辞典 *German Dictionary* (Follett Publishing Company, 1966) には、形容詞ではあるが、“serene”の訳語として“hell,” “klar,” “heiter,” “ruhig”が挙げられ、*“gelassen”*は挙げられていない。
- (27) *Die Religion in Geschichte und Gegenwart*, 3. Aufl., Zweiter Band (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1958), S. 1310.
- (28) この学校は、将官から下士官までが、旧軍がナチス時代に犯した過ちを繰り返さないよう一定期間学ぶ。西ドイツ特有の軍の学校である。“Inneren Führung”は戦後の西ドイツの連邦軍の倫理的な指導理念である。“Inneren Führung”の訳語は定着したものが無いようである。以下の事典に用いられている「指導と道徳理念」という訳語をとっておいた。

『ブリタニカ国際大百科事典』小項目事典 (Reference Guide) 第一巻、六四三頁。

(29) *Pädagogik in selbstdarstellungen*, S. 333.

(30) フースラは、英国人で英国教会の出身、オックスフォード大学で神学を修めているが、その背景からすれば、彼女は、英国教会の「祈禱書」には通じていたであろう。

(31) 注(1)で触れたように、ニーバーの祈りを載せたヴァイルヘルムの文献と、その著者エーティンガーがヴァイルヘルムのハンネームであることを知っていたシュルツでさえ、ヴァイルヘルムの回顧の文章が載っているこの書については知らなかった。シュルツ、上掲記事を参照。

(32) Fox, *Reinhold Niebuhr*, p. 324, Note 16. ノイバンマーは次のようなニーバー研究書を書いている。Reinhard Neubauer, *Geschenke und umkämpfte Gerechtigkeit* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1963)。

(33) Letter of Ursula M. Niebuhr to Karen Hill of Hallmark Cards, Inc., October 19, 1969.

(34) Letter of Ursula M. Niebuhr to B. B. Gennet, March 6, 1970.

(35) Niebuhr, "To Be Abased and to Abound," p. 7.

(36) Letter of Jane Holappa, Secretary to Reinhold Niebuhr to Knight, March 20, 1969. ニーバーの秘書が差出人になつてゐるがこの前後の手紙からすると、これはフースラの指示による手紙であることは間違いないと思われる。

(37) Niebuhr, "A View of Life from the sidelines," in *The Essential Niebuhr*, p. 251.

(38) Reinhold Niebuhr, *Justice and Mercy*, ed. by Ursula M. Niebuhr (New York: Harper & Row, 1974), p. vii. 邦訳…

梶原寿・訳『義と憐れみ』(新教出版社、一九七五年)、iii頁。

(39) Niebuhr, "A View of Life from the Sidelines," in *The Essential Niebuhr*, p. 251.

(40) 大木英夫『偶然性と宗教』(ヨルダン社、一九八一年)、二九一頁。